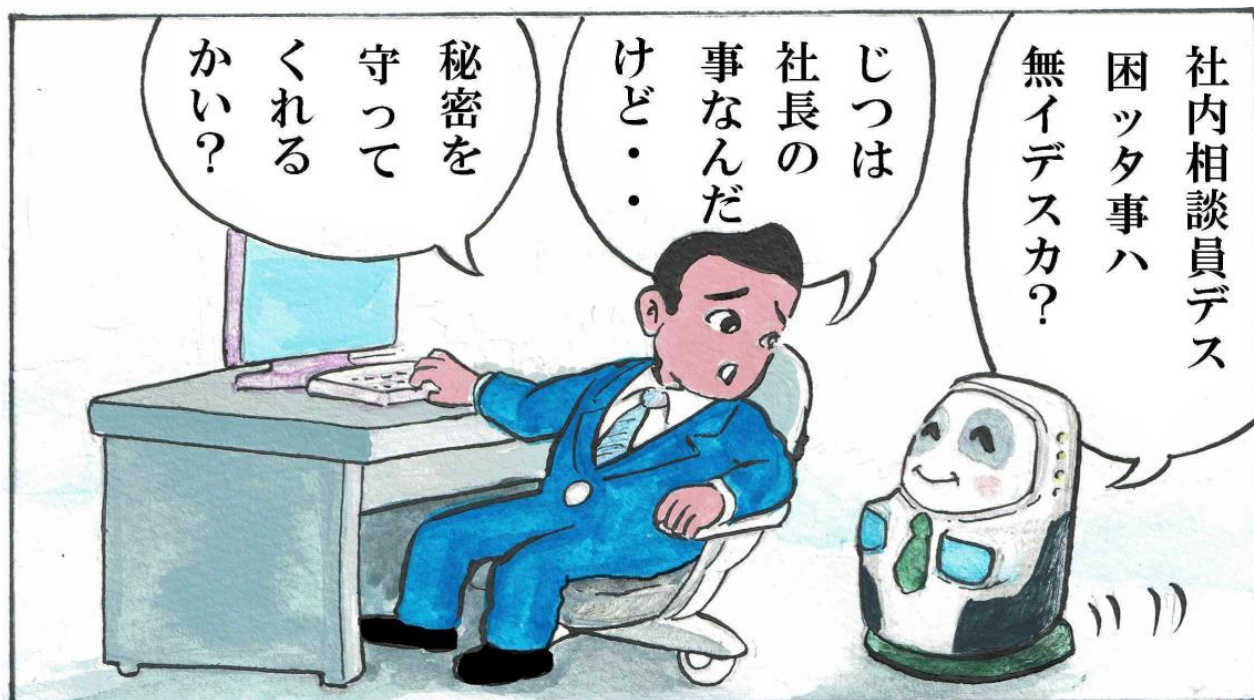


月刊 デイノカ

JMITU



9月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2024 年発行

No.477

2024年

秋闘・年末一時金要求提出

私達労働組合（JMITU）

は10月9日にセガ、SLS
に対し、秋闘・年末一時金要
求を提出します。

要求内容は以下の通り

- 1、アルバイト、パートタイ
マーの時給を2000円
以上にすること。
- 2、アルバイト、パートタイ
マー、派遣・請負社員を
本人の希望があれば正社
員にすること。
- 3、アルバイト、パートタイ
マーに退職金制度を設け
ること。

4、新人事制度を廃止し、導

入前の賃金体系に戻すこ
と。

5、昇格の基準を明確にし、
社員が納得できる昇格制
度にする。

6、人事制度において評価給
がテーブルの上段に達し
た場合、昇格試験の機会
を与える。

7、1日実働7時間、週5日
制、35時間労働とする
こと。

8、高齢者再雇用における有
期契約社員の給与を、定

年時の月額基準内賃金の
80%で算定し支給する
こと。希望するものには
70歳まで再雇用するこ
と。

9、リロクラブポイントを年
間5万円分にする。

アルバイト、パートタイ
マーにもポイントを付与
すること。

10、事業所の移転・統廃合、
会社分割・合併・営業譲
渡など企業組織の変更、
子会社の設立、海外への
生産移転、工場・営業所
の進出、新業種の進出・
業種転換、資本の移動、
企業間提携、廃業、企業
倒産にかかわる私的・法
的手続きの申立・実行、
その他、重要な経営施策

の変更については、労働
組合と事前に協議し、同
意を得たうえで実行する
こと。

11、退職金を、勤続1年に
つき基準内賃金の2ヶ
月分とすること。

12、家族手当を妻3万円、
子（出生児から高校卒
業まで）2万円と支給
すること。アルバイト、
パートタイマーにも家
族手当を支給すること。

13、業務外傷病有給休暇を、
一般従業員にも現行1
0日から最高60日
（休日除く）を与える
こと。診断書代の実費
を会社負担とすること。

14、社会保険料の負担割合を労使3対7にすること。

15、本人が結婚するときの結婚休暇は、連続2週間（休日含む）とし、子供が結婚するときは3日（休日含まず）とすること。

16、忌引休暇を、喪主7日、正父母・配偶者・子供の場合7日、祖父母・兄弟・姉妹・配偶者の父母の場合5日、伯（叔）父・伯（叔）母・配偶者の兄弟の場合2日にすること。

17、家賃補助について家賃の30%を会社が支給すること。

18、アルバイト、パートタイマーに社員同様、慶弔休暇を付与すること。

19、災害等による自宅待機や早退・遅刻について、正規、非正規にかかわらず賃金を100%保証すること。

年末一時金

セガ

2024年年末一時金として、基本給の4カ月分を支給すること。

有期契約社員にも正社員同様支給すること。ただし査定を行わないこと。及びパートタイマー、アルバイト従業員にも、年末一時金を支給すること。

SLS

2024年年末一時金として、賞与資格別基準額を2万円底上げし、係数4.0を支給すること。ただし査定を行わないこと。及びパートタイマー、アルバイト従業員にも、年末一時金を支給すること。



掌編小説

目 標

仙洞田一彦

そのごく一部分の職場です。どういう計算をしたのでしようか。

昔、昔、ある所に、笑顔の絶えない職場がありました。明るいおしゃべりも聞こえていました。そうかといって、仕事が進まないわけではありませんでした。職場の長もみんなの輪に入ってなごやかに働いていました。

ところがある日、上の方から命令が来ました。どういうふうに計算したのか分かりませんが、その職場のもうけをもっと上げなさいというのです。職場のもうけといっても、そこは物を仕入れて、売っているわけでもありません。会社全体としては、そういう計算ができるかもしれませんが、

よく理解できなくても、上から命令がありますと、なんとなく窮屈になります。笑顔も、おしゃべりも少し減ったような気がします。でも、仕事は一生懸命していました。今までだってがんばっていたなかったわけではありません。自分で、ここは頑張りどころ

だなと思えば、体調が多少悪くても出勤していました。期末、月末の忙しい時に、子供の学校の行事が入っても、休まずに出勤することもありました。

半年くらいたったころ、「以前と全く変わっていない。目標をかなり下回ったままで」と、上から言って来たよう

です。職場の長も上に呼び出され、目標が達成されなければ、クビにするとか、脅かされたようでした。もともと明るい性格の人でしたから、その落ち込み方は職場のみんなが見ていても気の毒になるくらいでした。あっけらかんとしていて、この人に悩みなんかあるのかと思っただけに深刻でした。

職場のみんなも同情し、仕事をこれまで以上にがんばろうと思いました。しかし、和気あいあいという雰囲気はなくなりしました。職場が暗くなることは、活気がなくなるということです。一生懸命にやっているつもりでも、仕事の速さが落ちました。

それでも職場の長は、笑顔は減ったものの、体調の悪そ

うな人を見れば体を心配し、休暇を取ることを勧めました。不幸のあった人には、忙しくても忌引休暇を認めました。

しかし職場の長は、何度か上に呼び出されていたようです。そのたびに落ち込み、つたのかは分かりません。その職場の長の人柄から推測するしかありません。職場の仲間を大切にする人でした。悩みを聞き、寄り添うことのできる人でした。そういう生き方にそわない話が、上の方から強制されていたのかもしれませんが。

職場の長が変わりました。真っ先にしたことは、職場のあちこちに監視カメラをつけたことです。職場の長の机の上のパソコンから、その画面

を見ることができません。初めのうちはそのカメラに向かって「あかんべい」をして見せる人もいました。無論、職場の長が机にいない時を狙ったのです。周りのみんなは大笑い、とは言っても以前とは違い、声をたてずに口を大きく開けただけです。

ところが録画されていたのです。「あかんべい」をした女性は、職場のみんなを笑わせて明るくする人でしたが、クビになりました。

これはおそろしい事ですな
どと、改めて言う必要もないでしょう。カメラやマイクを意識し、仕事中の会話はなくなりしました。

ある人が、肩が凝ったのか、作業中の手を止めて、何度も何度も首を回したり、肩の上

げ下げをしたりしていました。その人ばかりではありません。そうです、労働時間が長くなったのです。残業時間が増えたのです。休日出勤も、以前は数えるほどしかなかったのに、日常的になりました。

肩の上げ下げ、首を回す運動は歳の行った人ばかりでなく、若い人もやるようになりました。

すると監視カメラを見ていたのでしょうか。職場の長がやってきました。「さぼるんじゃない」あるいは「会社は学校と違う。体操なんかする所じやない」と怒鳴りました。その怒鳴り声が何度も重なり、みんなもそれを覚悟で体操しました。画面できないほど体がきつくなっていたのです。

ある日のこと、職場では歳

の上の方の人が、腰に手を当てて、膝の屈伸をしていました。長時間の立ち作業が、膝に來たのかもしれない。

膝の屈伸をしているところに職場の長が飛んできました。すると、今日は怒鳴りません。体操を手伝うかのように、その人後ろに立ち、その人の腰に自分の両手を当てて「いちに、さん、いちに、さん」と、声を出して自分も、その人に合わせて屈伸を始めたのです。その人が屈伸を止めようとしても、職場の長は手を放さずに、背後から「いちに、さん、いちに、さん」とでかい声を出して、掛け声も屈伸も止めようとしません。いやその人の屈伸を止めさせようとしません。

まわりのみんなは、はじめ

は、その二人の姿に吹き出しそうになりました。しかし、屈伸を止めたくても止められないその人の表情は、だんだん困ったように歪んでいきました。まわりの人も、職場の長の行為を、その人の表情からイヤガラセと感じるようになりました。屈辱的というのでしょうか。みんなはひどくやな気分になせられました。膝の屈伸をしていた、例の人もやがて職場を去っていきました。みんなのいる前で、ああいはずかしめを受けたので、心に深い傷を負ったのだと思います。

こんなことがあって、仕事の中に肩にこりを感じても、首を回すことすらできなくなりました。そうこうしているうちに、残業代が減らされるこ

とになりました。残業する時間はこれまでと同じです。残業手当の付かない時間が設けられたのです。これを機にさらに、職場から仲間が去っていきました。

目標が変わらないので、一人当たりの仕事量も増えました。

ある日、立ち仕事をしていた人が、突然膝をつき体を前に折ってしまいました。周りのみんなは駆け寄りました。

「大丈夫か」

声をかける者もいましたし、「おい、大丈夫か」と言って、体を揺する者もいました。

駆けてきた職場の長が言いました。

「みんな仕事をしろ。人を助けるのは仕事じゃない。仕事だ、仕事だ。自分の仕事にか

かれ。目標を実現するんだ」

みんなはその場を離れました。うずくまってしまった人は、さいわい、少しして自力で立ち上がる事が出来ました。職場の長は、それを見届ける

と、「仮病使うな」と吐き捨て、忌々しそうに事務所に戻って行きました。仮病なんかではないはずです。貧血かなんかで倒れたのでしょうか。

ある日、職場の長が、職場の見回りに来ました。血走った眼をしています。職場のみんなに対する感情が、目に表れているのでしょうか。それとも体の異常が目に出ているのでしょうか。そんな様子を横目で見ながら、みんなふだん通りというか、緊張して仕事をしていました。

するとボタンと、みんなの

後ろで大きな音がしました。立てかけてあった柱が倒れるような音でした。振り返ると、職場の長が床に倒れていました。誰かが駆け寄ろうとしました。

「仕事をしていた方がいいぞ」と、とつさにささやくような声がしました。

「見て見ぬふりは出来ないだろう」

と、答えた声もささやくような声でした。

「助けに走って『さぼるな』と怒鳴られたんではたまらん」

これもささやくような、別の声でした。

「呼吸しているか」

「わからん」

「仕事をつづけた方が、身のためだぞ。仮病かもしれん」

「演技かもしれん」

「職場は人を助けるどころじゃないぞ」

「会社の罠かもしれん」

この後も、ささやくような声での会話が続きました。

「職場目標達成のためだ、仕事を続けよう」

ささやくような声でしたが、力強さが感じられました。確信もこめられていました。

「おう」

みんなが答え、みんなは今までやっていた仕事に戻りました。

会話が聞こえていたのかどうか、部下の声を聞いて喜んでいたのでどうかわかりませんが、職場の長はそこに横たわったままでしたとき。